

蝶のように舞い踊る

# せり込み蝶六

越中魚津のせり込み蝶六  
目出度い踊りでございます  
目出度の  
あの若松様よ



## 勇壮・華麗な漁の舞、 たてもん祭り

提灯あかりが夜空を彩り、勇壮な掛け声が町に響き渡る時  
絵額の武者絵も彩り鮮やかに、今年の夏も胸踊る。

◆ 国指定重要無形民俗文化財  
◆ 県有形民俗文化財指定  
◆ 国記録作成等の措置を講すべき無形民俗文化選択

### たてもん祭り

(8月第一金・土曜日 諏訪神社)

“たてもん”は高さ約16mもある大柱に、90余りの提灯を三角形につるし下げ、その下に絵額をつけて長さ10m、総重量約5トンもあるそり台に立てて、80人ほどの人々によつて威勢よく曳きまわす舟型の万燈です。

この形は三方に贋物を山と積んで神前に供える形をかたどったもの、あるいは全体が帆をあげた漁船をかたどったものといわれ、また神前に供え掛けたままの言葉がなまり“たてもん”と呼ばれるようになつたといわれています。

たてもん祭りは、毎年8月第一金・土曜日夜、諏訪町の漁夫の宮諏訪神社氏子の町内から7基の“たてもん”が繰り出され、はつび姿の威勢のよい若者によつて曳き廻されるが、明治の頃は25、大正の始めは50と提灯の数はさらに増え、今日のような形になつたと伝えられています。又、各町内がいくつかの提灯を台上につるして町内をかつぎまわつたものがその後しだいに提灯の数を増やしはじめ、優美さはまさに夏の夜の風物詩であり、魚津の誇る郷土行事の一つです。



文・宮坂 彦成

市・無形民俗文化財  
「魚津せり込み蝶六解説」

この民謡は、江戸時代全国に口説を広めた越後の瞽女達により伝えられ、それを地元の先名米次郎・中森重次郎両专名により、毎年お盆になるとお寺やお宮の境内で、笛や扇やちょうちん等を持ち、祖先の御靈を祈り、豊年を祈願して踊り明かしたのが始まりです。激しい音頭のリズムに合わせて踊るこの踊りは、まるで極楽蝶が舞うかのよう、その名前がついたと伝えられている。

この民謡は、江戸時代全国に口説を広めた越後の瞽女達により伝えられ、それを地元の先名米次郎・中森重次郎両专名により、毎年お盆になるとお寺やお宮の境内で、笛や扇やちょうちん等を持ち、祖先の御靈を祈り、豊年を祈願して踊り明かしたのが始まりです。激しい音頭のリズムに合わせて踊るこの踊りは、まるで極楽蝶が舞うかのよう、その名前がついたと伝えられている。



## せり込み蝶六（舞台音頭）

ハア ハイヤー ハイヤ

分ア ヨイヤヨー

ハイヤー ハイヤは

（ヨーリ ヨーイ）

（ホリヤ ヨイ）

ハイヤー そのせいよし

これわいどうとこんなは

（ハリヤ ハイトサ

ヨイヤコフシヨ）

おらがさー ハヨイヤイ

これからこれは何事

え何よとさてたずねりや

越中魚津のせり込み音頭

お買の買での日夜を明かし

済むの済まぬと子孫の事に

腹も立てたり笑いもしたり

罪業ばかりで月日を暮らし

大慈大悲の御恩のほどに

怠怠ばかりで年月送る

今日もむなしく過ぎゆくことは

充るの買での日夜を明かし

济むの済まぬと子孫の事に

腹も立てたり笑いもしたり

罪業ばかりで月日を暮らし

大慈大悲の御恩のほどに

怠怠ばかりで年月送る

今日もむなしく過ぎゆくことは

充るの買での日夜を明かし

濟むの済まぬと子孫の事に

腹も立てたり笑いもしたり

罪業ばかりで月日を暮らし

大慈大悲の御恩のほどに

怠怠ばかりで年月送る

今日もむなしく過ぎゆくことは

充るの買での日夜を明かし

